



**Data**

監督・製作・脚本：図師三千男  
プロデューサー：竹本克明  
出演：夏未エレナ / 颯太 / 麻生祐未  
/ 風間トオル / 美木良介 /  
松本明子 / 松山メアリ

## 👁️👁️ みどころ

時代は昭和20年8月15日の数日前。舞台は宮崎県の、とある山間の町。そこで勤労奉仕に励む15歳の少女が体験した、兵隊さんとの一夜の出来事とは？ タイトルの意味がわかるのは後半に入ってから。また特攻人形の意味がわかり、涙がどっとあふれてくるのは、ラストのクライマックス。何の宣伝もなく、場末の映画館でこんないい映画が上映されるとは！ 特別出演した東国原知事は自民党総裁候補を目指すなどの暴挙に走らず、こんな映画を宣伝し、広く世の中に知らしめなければ・・・。

## 集合写真から続く弁当シーンで、思わず涙が・・・

本作前半の時代は、敗戦の日である昭和20年8月15日の少し前。舞台は宮崎県の山間にある田舎町。映画は今の若者たちにあの時代の少女たちの生き方を教えるかのように、畑仕事に勤労動員された高等女学校の少女たちの姿を追っていく。30数名の集合写真のほぼ真ん中に座るのが、本作の主人公星ユリ枝（夏未エレナ）。そのモデルとなったのは、宮崎日日新聞社と九州電力宮崎支店が共催した「お茶の間エッセー」で特選作となった『三十九枚の年賀状』の作者である松浦百合子さん。そして、70歳にして本作が監督デビュー作となった図師三千男監督は、この松浦百合子さんの実の弟。つまり、本作に登場する2人のガキ大将のうちの1人だ。

私は戦争当時の学校制をよく知らないが、ユリ枝は高等女学校4年生の15歳。本来なら学校で勉強しているはずの年頃だが、あの時代それはかなわず、はちまきを巻き鎌をかきで毎日畑仕事に勤労奉仕する日々だったことがよくわかる。冒頭のそんな物語を盛り

上げるのは、ユリ枝とその親友千鶴（ちづ）（松山メアリ）とのいかにもあの年頃の女の子らしい付き合い。ユリ枝の父親星稔（美木良介）は鍼灸院を営んでいるうえ、広いお屋敷に住んでいるから意外とリッチ？もちろん、そんなことはないだろうが、親友の千鶴は畑仕事の合間のお弁当の時間になっても「お腹の調子が悪いから食べない」と言って1人本を読んでいたので、ユリ枝よりずっと貧乏？それぞれの家庭の事情は徐々に明らかにされていくが、みんなが楽しそうに広げている弁当箱の中身を見て、私は思わず涙が・・・。

先日来国民的議論になっている（？）セブンイレブンのコンビニ弁当廃棄問題と対比してこのシーンを観れば、飽食ニッポンのバカさ加減を改めていく大きな問題提起になるはずだ。

## 文学少女には、いい先生が・・・

現在大阪府では橋下教育改革が大きな注目を集めているが、本作におけるユリ枝と千鶴という2人の文学少女（？）の姿をみると、先生への尊敬の念と先生と生徒との信頼関係がいかにかがやくわかる。映画には登場しないが田口先生は本好きだから、その家には本がいっぱいあるらしい。そして兵隊に行く時田口先生は、読みたい本があればいくらでも持っていけと言ってくれたらしい。そんなわけで、千鶴が手に入れることができた大好きな1冊とは？

本作はラストに『そは美しき』という主題歌が流れるが、その結びは「共に生きた時代、そは美しくあけぼのの如くなり」というもの。2人の女学生の文学談議（？）をみると、大切な本の文章を大きな声を出して読むという基礎的なところから教育を立て直す必要があると痛感したが・・・。

## エッセーのポイントは、8月12日の深夜

図師監督が冒頭に描くユリ枝と千鶴を中心とした女学生たちの勤労奉仕の姿と、空襲警報のたびに「いよいよ本土決戦か」と心配する町の人々の姿は淡々としたものだが、それが逆に私たちの心に響いてくる。しかし、それはあくまで導入部で、松浦エッセーのポイントは敗戦3日前の8月12日の深夜の出来事にある。

とは言っても、あの当時夜の11時、12時までテレビ番組を観ているはずはないから、10時頃には寝静まっていたが、その時トントンと玄関の戸をたたく音が。驚いて稔が対応すると、「行軍の途中で戦友が倒れた。少し休憩させてほしい」とのことだ。そのために星家の門をたたいたのが、河村彰（颯太）稔と妻のサヨ（松本明子）そしてユリ枝は河村と共に急いで倒れている2人の若い兵隊を家に連れてきて手厚い介抱を。そこで感心するのが、水浴びをさせて服を洗ってやり、布団を提供する他、星家にとってなけなしのお米のご飯を惜しげもなく3人の兵隊さんに提供してやること。今ドキの連帯感を失った日本人では、行き倒れの人がいても、「俺には関係ねえ」とばかりに見過ごすのでは？

こんな丁寧な世話を受け、やっと寝ようかという時に河村が持ち出したのが、大好きなハーモニカ。夜中にハーモニカを吹くとは何とも迷惑な話だが、さてその曲目は？ここで河村がハーモニカを吹いた意味は？また、河村の思いを察した星家の人たちのそれに対する反応は？この一夜の出来事で、ユリ枝と河村が目をあわせたのはほんの一瞬だけ。しかし、それがユリ枝のその後の人生に大きな影響を与えることになるうとは・・・。

逆に言えば、そんな重い重い昭和20年8月12日の深夜だったからこそ、松浦エッセーが特選作に選ばれたわけだ。

## 鬼畜米英から民主主義へ大転換！

前半はユリ枝と千鶴が、そして女学校の庭で少女たちが「鬼畜米英！」と勇ましくかけ声をかけながら走る姿が印象的だったが、後半からは特攻帰りの兵隊のエピソードを交えながら民主主義への大転換が描かれていく。そして、遂に本作のタイトルである年賀状のストーリーに入っていく。とは言っても、最初にユリ枝のもとに配達されるのは年賀状ではなく手紙。ユリ枝宛とされた封書の差出人には河村章と書かれていたが、これって誰？ひょっとして・・・？そう、河村はあの一瞬目を合わせた時に、防空頭巾に大きく書かれていたユリ枝の名前を覚えていたわけだ。

ちなみに、小泉純一郎元総理が仕掛けた2005年9月11日の衆議院議員総選挙の争点は郵政民営化の1点だったが、今やそのように肥大化し非効率的になってしまった郵便局が戦後再び年賀郵便の取り扱いを再開したのは昭和23年。もっとも、年賀郵便の取り扱いが再開されない中でも、年賀のハガキを送る人はいたようだ。そして、はじめてユリ枝のもとに河村からの年賀状が届いたのが昭和22年1月1日。すると、39通の年賀状が届いたということは昭和60年まで？なるほど。しかし、それがタイトルになっているということは、40通目は？

昭和60(1985)年といえば昭和が終わりかけた時代であり、かつバブルの絶頂期でバブルがはじける直前の大混乱の時代。そんな時代に、河村の身に一体何が？

## 特攻人形とは？どっと涙が・・・

3人の兵隊をもてなし、彼らが眠った後ユリ枝はマフラーの毛糸を解いて1人で人形づくりに精を出していた。それを翌朝別れていく3人にプレゼントしたが、これは一体ナニ？私を含む多くの方は、それがわからないまま前半を観ていたはずだ。しかし、終盤にかけてユリ枝役が麻生祐未に代わり、河村役が風間トオルに代わり、さらに河村の息子が登場してくる中、これが「特攻人形」なるものだということや、それに込められた深い意味がわかってくる。そして、三十九通の年賀状と共に残されていた特攻人形の登場をみて、物語はクライマックスに。麻生祐未のしっとりとした熱演と合わせて、あなたの目に涙があふれてくること確実だ。

本作は天六のホクテンザ1館だけの公開で、例によって観客はまばら。宣伝が行き届いてないからやむをえないが、映画関係者やマスコミはこんな映画こそ宣伝しなければ・・・。

## 東国原知事は、もっと積極的に本作の宣伝を！

本作の舞台は凶師監督の故郷宮崎だし、宮崎日日新聞社の特選エッセーを題材としたもの。他方宮崎と言えば、宮崎（特産品）の宣伝マンとして際立った能力をみせる、東国原知事がいる。国政への転身と自民党の総裁候補として認めてくれとの談判（？）がボヤかったため、今後東国原株が暴落していく可能性があるが、本作にはそんな東国原知事があっと驚くシーンで登場し、あっと驚く名演説（？）をするから、それに注目！

もっとも、私は本作を観るまで、本作の内容を全然知らなかったし、東国原知事が特別出演していることも知らなかった。東国原知事も総選挙が迫る政局の中で何かと忙しかったのはわかるが、せっかく宮崎を舞台とし、あの時代を今の若者たちに伝えるこんないい映画が完成、公開されているのだから、もっと積極的に広報マンとしての役割を果たさなければならぬのでは。

2009（平成21）年7月21日記

### 上海虹口地区に「老場坊」がオープン！

09年9月13日付日経新聞は、高層ビルが林立する上海で昔の建築物の風情と情緒を残したまま再開発し、魅力的な観光スポットにしようとする動きが広がっていることを特集した。その先駆けの一つは、市内を流れる蘇州河のほとりにある紡績工場跡地にアトリエや画廊など100軒強が集まる「莫干山路50号」。今では観光ガイドには必ず掲載される観光資源らしい。表紙撮影の舞台となった田子坊も、西洋と上海の建築手法が融合した「石庫門」様式の古い住宅街に画廊やレストランが入居した魅力的な観光名所で、高樹のぶ子氏の小説『甘苦上海』の舞台になったほどだ。

私が09年9月17日～20日の上

海旅行で訪れたのが、魯迅公園や魯迅故居などがある虹口地区だが、ここは旧日本租界のまち。そこに08年10月オープンしたのが、英国人が設計した1930年代の建物を改装した商業施設「老場坊」。コンクリートの打ちっ放しを利用し、現代建築と見まがうような斬新なデザインは新たな観光名所として話題を呼んでいるらしい。かつて食肉加工場だった老場坊は、周辺に住宅が増えた1970年前後に廃業し、その後その「建物は周りから忘れられた存在だった」らしいから、何ともしごい変わりようだ。次回の上海旅行では必ず見学しなければ。

2009（平成21）年11月5日記